

---

Ⅳ

4年次科目  
授業概要

---

# 授業科目の概要

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容
必修科目	総合科目 生命と倫理	ゲノム計画など生命科学の急速な進歩、遺伝子操作やクローン動物などバイオテクノロジーの台頭などのために新たに生じたヒトの生や死に関わる倫理的な問題、生命観の再構築、さらに実験動物の生命権など生命に関する新しい価値観の問題を取り上げる必要が生じてきた。これらの問題を扱う新分野はバイオエシックスBioethicsと呼ばれる。 また、生命科学の研究には多くの制約（規制）がある。研究成果についてもクローン人間のように技術的に可能でも実施は許されない事もある。生命科学の研究は、これらの問題を念頭に置いて計画、準備されなければならない。また、生命科学部の卒業生はこれらの問題が問われたときに、この分野の専門教育を受けた科学技術者としての立場から自分の考えを述べなければならない。さらに、研究に伴う倫理問題も重要であり、科学、研究、技術社会についても考察する。本講義は、そのための基礎知識を提供することを目的としている。
	生命科学特講	研究室のテーマや関連する研究内容について、英語論文を読解し、その論文内容を発表する。卒論学生は何処が面白いのかを明確に理解すると共に、その要点を正確に伝えられるように指導される。さらに教員、大学院生からの質問に対して的確に答えられるよう指導される。プレゼンテーションについても指導を受ける。
	専門科目 ゼミナール	教員、大学院生、卒論学生が参加して行なう。テーマに沿って、第一に研究の背景と内容についての理解するために、論文調査等を行なう。その後目的達成のためにどのような方法が良いかを検討し、実際に行なった実験の方法と結果の検証、結果に関する考察、今後の進め方を議論する。卒論学生は発表し、議論に加わる事により、論理的思考力と問題解決能力を培う様に指導される。また、プレゼンテーションの技法を修得する。
	卒業論文研究	卒論学生は研究テーマが与えられると、そのテーマの遂行のために必要な実験手技および種々の測定機器などの装置類の操作法を体得しなければならない。そのための実験操作に付いては、初期の段階できめ細かく指導を受ける。一定の技術が身についたところで本格的に実験を開始するが、実験技術のさらなる向上のためにも、常に実験指導を受ける。研究の内容によっては、毎日でも実験データを教員と共に解析したり、新しい取り組みの方法などの検討をする。最後に一年間の研究の成果をまとめ、公開で口頭発表を行なう。

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容
選 択 科 目	教育実習Ⅰ	<p>本学では教育実習は4学年に3～4週間にわたり実施している。この期間は各実習校に行き各自実習することになるが、この実習はこれまでに教職課程の各授業で学習してきたすべての総決算の場である。この場中途半端な気持ちで立つことは厳禁である。それ故、教育実習を実施するに当たり、教育実習とはどのような意義をもち、どのように対処していくべきかを理科教育法の講義と関連づけながら、1. 実習前に行うべき事、2. 実習期間中に行うべき事、3. 実習終了後に行うべきこと、以上の3点にわたり集中講義で具体的に講義する。</p>
	教育実習Ⅱ	<p>教育実習は4学年で3～4週間実施している。この期間、各実習校に行き各自実習することになるが、その実習校で実習がしっかりできたかどうかを把握するため実習生活の発表をしてもらう。この際、教職課程を履修している3年生もこの報告会の参加を義務づけ、次年度の教育実習への参考とさせ、あわせてその報告会へ参加の実習生（4年生）、3年生および教職課程委員会の教職員の間の交流会の場とする。また実習生には実習校での研究授業に使用した指導案、教育実習の記録を提出させる。その上で、教育実習の成果を総合的に把握する。</p>
	教職実践演習 (中・高)	<p>4年間の総まとめとして、講義で学んだ知識と実習で得た経験を振り返るとともに、より発展的な内容について調査・議論・発表・演習を行い、教職についての理解を深めること、教員としての資質を養うことを目的としている。</p> <p>本演習においては、①グループ討議およびロールプレイング（教職の意義、教員の役割、保護者や地域の関係者との人間関係の構築、学級経営等のテーマを扱う）、②調査・研究（現在の教職・教育の現状や課題について）、③模擬授業を行う。本演習を通じて、教員としての自覚を養うとともに、職務上遭遇するさまざまな課題を解決する能力を伸ばせるよう、積極的に取り組むことを期待する。</p>